

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 日置 貴之

本論文は、明治維新期の歌舞伎が、旧来の江戸歌舞伎とどのような点が異なり、どのような点が新しいのかということ、新作の題材、作者、役者、落語や錦絵新聞との関係等、多方面から考察したものである。本論文の構成は、第一章「散切物と古典」が「於岩稲荷験玉櫛（おいわいなりりしょうのたまぐし）」と五代目尾上菊五郎等の四節、第二章「戦争劇と災害劇」が「上野戦争の芝居」等の三節と補論「日露戦争劇「敵国降伏」、第三章「上方劇壇と「東京」」が「明治初期大阪劇壇における「東京風」」等の五節から成り、末尾に附録篇として「東京都立中央図書館加賀文庫蔵『合載袋』」を添える。

第一章は、新時代の風俗を作中に取り込んだ黙阿弥らの「散切物」を詳細に検討しながら、「散切物」にも古典作品の効果的な利用がなされていること、例えば「東京日新聞（とうきょうにちにちしんぶん）」の主人公の士族鳥越甚内の造形には悪七兵衛景清の人物像の強い影響があり、それが自らが属した階級が消滅しつつある甚内の姿を描写する上で有効に働いていること等を明らかにする。

第二章は、上野戦争（戊辰戦争の戦闘の一つ）、日清戦争、日露戦争、明治三陸地震津波等を題材にした、歌舞伎における戦争劇・災害劇を取り上げ、作中のエピソードや登場人物が徐々に実説に近いものとなっていくこと、また戦争劇と災害劇には演出上の共通性があり、現実に近い光景を舞台上に再現していること等を指摘する。

第三章は、大阪を中心とする上方劇壇と東京劇壇の共通性・異質性や影響関係の実態を、台帳、評判記、劇場関係文献等々の諸資料から多角的に検討し、「東京風」を志向した改革期の上方劇壇にあっても、単なる東京の模倣ではない独自の特色があること、そもそも当時使われた「東京風」「大阪風」という語の意味するところも単純ではなく、例えば明治二十年代前後に東京の春木座で上演され「大阪風」とされた歌舞伎は、すでに明治初年から「東京風」の洗礼を受けた「大阪」の芝居に他ならないこと等を、初めて明らかにする。

従来、明治維新期の歌舞伎研究は、黙阿弥のいくつかの作品についての言及を除いては、寥々たる有様であった。本論文は、この時期の歌舞伎について、多種多様な資料を読み込み各作品の内容について丁寧に論じつつ、その全体像を把握した初めての研究である。とりわけ、上方劇壇の動向や災害劇についての新たな知見は、今後の研究全ての出発点となるであろう。本論文では省略された「活歴」の考察など、今後さらに研究の深化が期待される所もあるが、明治維新期の歌舞伎の歴史的意義を、膨大な資料と緻密な分析によって明らかにしたことは、歌舞伎研究に新生面を開くものとして高く評価できる。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断した。